

COMPLEMENTARY SOCIOLOGY

Gross National Happiness は、ブータン王国第4代ジグミ・シンゲ・ワンチュック現国王が発した、“Gross National Happiness is more important than Gross National Product”というスピーチと共に産声をあげた。

以後の論議は、スピーチをなぞり「GNPではなくGNH」をスローガンに多くの研究者が既存の経済学に対し攻撃的に論議を展開してきた感がある。

著者は、社会学や経済学といった学問の現場から、遠く離れた場所で自分なりに GNH を観察してきた。その場所とは医療現場である。医療と言っても未だ法律的に「医療行為」とは認められていない鍼灸、接骨、足底反射療法といった「医療類似行為」を業としてきた。この「医療類似行為」は最近ようやく認知され始めたとは言え、まだまだ医学会全体に頑固たる地位を確立しているとは言い難い。その理由は、この分野が「科学的な根拠や論証にかけている」という点であろう。

現代医療の分野では、社会的に研究が認められるためには解剖や化学実験に代表される化学的分析による一定数以上の症例が必要とされている。しかし、化学的分析に拠らない鍼灸などに代表される伝統医学の症例には大きな個人差があるばかりか同一人物でさえ、条件によって症例の結果が大きく変わる。

加えて理論を構築するにしても「医療類似行為」は、経験的な記録に依存が大きく、一定数以上の類型症例を出すのは不可能と言ってよい。しかし、ここ数年の医学会の動きとして、欧米を中心に「医療類似行為」に対しての新しい見解が発表されるようになった。

その新しい見解とは、最新の現代医学の研究室で、従来現代医学では治らないと言われた疾病症状に「医療類似行為」は効果があると実証されたのである。それまで医療行為と「医療類似行為」は「西洋医学か東洋医学か」という比較で考察されることが多かったが、この研究発表後「医療類似行為」は、“Alternative Medicine (代替医療)” もしくは “Holistic Medicine (全人的医療)” と希望をもった呼び名で呼ばれるようになった。

近年では英国を中心に “Complementary Medicine (補完医療)” と呼ばれるに至っている。その意味合いは「現代医療の不足する点を補うための医療」である。つまり最先端の医療研究が、現代医療以外の医療的行為すべてを “Complementary Medicine (補完医療)” と位置付け、新たな枠組みを設けたわけである。

ここで著者は、飛躍するようだが、近年の伝統医学が迎えた歴史的事実と GNH の未来に対して同じ方向性のビジョンを見いだしている。何故「医療類似行為」と GNH 研究が同じ方向性かを説明するならば、両者ともに「主観」の関与する割合が大きい点である。この点に対し多くの学者は「実証されない思考など問題外」だと非難するだろう。

現代社会に生きる我々は、社会学や経済学の偉大な恩恵を享受し、今日の豊かな生活を獲得してきた。この既存の社会学や経済学は、現時点で行き詰まりの様相を見せている社会をリードしてきた学問ではあるが、我々はまだまだこれら既成の学問以上の実証手段を

見出すことは出来ない。これら既存の多くの学問に比べ GNH 研究はそれ自体では実体を持ち得ない学問である。経済学、社会学、環境学・・・これらの既存の学問を包括的に論じ、これらの学問の壁を横断的に考察してこそ GNH 研究は初めてその力を有効に活用できるのである。この GNH 研究のスタンスである既成の学問の不足している点を補完していくという謙虚な姿勢には大きな意味があるのではないかと考える次第である。

文責 高田忠典